

## テーマ二 新来外国人とイエ問題

### 韓国人妻の意味世界

#### — 家族意識をベースに —

安 綿 珠

日本の経済発展とともに急増した新来外国人は、日本経済の停滞にもかかわらず増加し続けている。急増する新来外国人の問題については、様々な分野で研究が行なわれている。例えば奥田道大らは、新宿や池袋の新来外国人の生活実態を明らかにした(1)。駒井洋は、生活者としての新来外国人という観点から、新来外国人の労働者、ラテンアメリカの日系人、難民、中国帰国者等、日本社会で網羅される新来外国人の生活実態を研究した(2)。しかしこれらはいずれも、日本社会の側から新来外国人を捉えた研究であり、日本社会に生きる外国人の内面世界を明らかにしたものではない。

中でも国際結婚した新来外国人は、長期滞在もしくは永住する新来外国人の大きな部分を占めている。日本人

の配偶者となった新来外国人は、「日本に定住する外国人であり、どうしても一時滞在の労働者とは日本に対する関わりが異なる。彼・彼女は、日本の家族や地域社会の中により深く入り込んで生活する定住者」となる(3)。新田文輝は、異文化と共存する家族という主題から、欧米人と日本人の国際結婚カップルを採り上げた(4)。しかし欧米人は、日本社会の中でその他の外国人より有位な地位にあることから、その研究を新来外国人の国際結婚カップルに一般化することはできない。また日本農村の男性とアジアの女性との見合い結婚を採り上げて、結婚の動機や結婚生活の様子を紹介した研究もあるが、これもまた外国人の内面世界を主題にしたものとはいえない(5)。

とくに国際結婚した新来外国人妻は、社会の基本単位である家族の中で「日本」と接するかたちで、広く社会と関わる前に私生活において「日本」と向き合うこととなる。家族の中に二つの民族が存在することで、異なる文化や意識がぶつかったり融合したりする。まさしく他人事でなく家族の中の問題なのである。そのため、社会一般における新来外国人の問題とは異なる性格を持つこととなる。社会一般に現れる問題とともに家族の中の内面的な問題を見ることが必要となってくる。このような問題場面において、では日本人男性と結婚した新来外国人の場合はどうであろうか。彼女らはどのように生きていけるだろうか。これを明らかにすることが本稿の主題となる。

新来韓国入妻（以下、韓国入妻という）は成人して来日した人たち、つまり韓国で人格形成をすませてきた人たちである。それゆえ彼女らを探り上げる場合、韓国で身につけた価値観、とくに「イエ」意識というものを検討することが必要となる。そしてその上で、結婚相手である日本人夫とその家族の「イエ」意識と比較することが必要となる。

分析方法として、まず韓国入妻に対して行なった聞き取りから彼女らの置かれた境遇を把握し、家族の中で遭

遇するいくつかの場面を抽出する。次に、彼女らがその境遇をどのように受け取り、どのように対応しているかを分析することで、彼女らの生き方の表層には現れない内面世界（意味世界）を分析し、解釈するかたちで進めたい。

## II. 調査概要

報告で中心となる面接データは、広島市に住む三人と山形市近郊に住む三人の韓国入妻から聞き取ったものである。広島市の三人については一九九九年九月から二〇〇〇年四月の間に、何度も聞き取りを行なったもので、その外に一〇人に対して行なった短い面接によるデータも合わせて用いた。

山形市のデータは、調査対象者の中の一人の家に四日間宿泊して参与観察を行なったものである。そこで紹介して貰った二人の韓国入妻との面接、及び宿を提供してくれた人の補足説明から成る。広島に帰って、宿泊提供者との数回に渡る電話連絡でデータの補足を行った。又、面接者の話の中に出てくるさらに三人の韓国入妻のデータも用いた。

中心となる六人の客観的な境遇は、〈表1〉の通りである。

〈表1〉 韓国人妻の境遇

|   | 年齢 | 家族状況 | 子供     | 結婚年齢 | 滞日年数 | 学歴 | 夫の韓国語力 | 夫の職業 | 地域    |
|---|----|------|--------|------|------|----|--------|------|-------|
| A | 34 | 夫婦   | 2      | 11   | 8    | 大卒 | 上手     | 会社員  | 広島市内  |
| B | 36 | 夫婦   | 2      | 11   | 8    | 大卒 | 若干     | 自営業  | 〃     |
| C | 31 | 同居   | 2      | 7    | 5    | ?  | 若干     | 果物屋  | 〃     |
| D | 41 | 同居   | 0      | 1    | 1    | 高卒 | 不能     | 会社員  | 山形市近辺 |
| E | 31 | 夫婦   | 1      | 3    | 3    | 大卒 | 不能     | 会社員  | 〃     |
| F | 45 | 同居   | 妊娠(K1) | 2    | 2    | ?  | 不能     | 管理職  | 〃     |

Fさんの子供の欄の( )の中のKは、韓国から呼び寄せた子供であり、その隣は人数を表している。

### III. 韓国人妻の家族意識

(1) 「帰りたいよ。こんなに近くなのに。私のゼイル

(一番ー韓国語)受け入れてね、その自分を日本人と同じようにね、住みたいんだけど、なんでそれが出来ないかね。ハハ(空中に向けての笑い。)それが難しいのよ。」「子供が学校行けばちょっと変わるとゆつとるからその時・・・(言葉をとぎらせて長いため息をつく)。」「日本で耐えられないから韓国へ行くのよ。」(6)(下線は日本語での会話で、あとは韓国語での会話である。)

(2) 「どこのどいつのトンケ(下げすみの言葉) (7)か分からないのが来たとして、どういう奴だろうという気があったように見える。私を何か下に見下ろしているんだなということが感じ取れる。挨拶をしても見向きもせず、人を馬鹿にするようなところがある。」(8)

(1)の場合は、日本での生活に適應できず気持ちが韓国に向いていることがわかる。そうしながらも「家族」という絆を切りたくないという考えを持って一人葛藤している。何が彼女をそうさせたのだろうか? (2)の場合は

関心が既に日本の家族に向いていることがわかる。家の中での境遇を韓国人妻は自己解釈している。家族は自分のことをどのように受け取り、どのように自分に接しているかを神経をとがらせて常に緊張している。また生活の中で葛藤を自己流に解決していく。

(1)と(2)は韓国で育まれた家族意識を持って自分の生活方針を決めている。その韓国で育まれた家族意識を基に家族や地域の日本人と接することにより、様々な状況が繰り広げられることとなる。様々な状況とはどのようなもので、それらを韓国人妻はどう解釈し、どう適応しているのだろうか？

#### 一、韓国人妻の価値観に適合的な場面

韓国人妻の家族意識は儒教思想の下で育まれたもので、それは「イエ」の観念であり、日本の家族意識と重なり合うことが多い(9)。そのことは、韓国人妻が日本社会に適応しやすくさせる要因となる。

同居に至るまでのことを一人の韓国人妻はこう語っている。

「お母さんが寂しいと思って」「私が(最初に)言ったの。」

「(夫の)姉さんが『家に男がいないと寂しいね』と

言いながら『一緒に住むのもいいね』という風にそんな話をちょこっと見せたの。それで私もそのほうがいいと思ったの。」

「主人が息子としてやるべき道理を果たしたいとして東京での職場も辞めて広島に帰ろうとしたので、私もそうすべきだと思ったの。」

「(私が)嫁として道理を果たしたということ」

韓国人妻は自ら同居すべきだと思っている。それが自分の持っている「嫁像」であり、その「嫁像」を実践したと言っている。しかしそこには夫と家族——夫の姉

——から期待が寄せられていることに気づいていないことがわかる。

韓国人妻はまた韓国で育まれた家族観を以て日本の家族に接していく。

「私は序列をきっちり守るほうなの。そして肩とかも揉んであげたりね。(中略)前には銭湯へ行ったりとき『韓国式はこうです』と言って全身のアカすりをしてあげたりもしたの。」「韓国人なら年配の方に対する身振りというのは誰にでも身に付いている。」「

「上の人には絶対逆らっちゃいけない。」「

このような意識で韓国人妻が日本の家族に接するとき、

日本の家族は次のように自分を受け入れていると韓国人妻は感じ取る。

「その反応がものすごく受けたのよ。よい嫁、孝婦として。」「そういうところが日本のお姑さんに受けるんだなって感じ。どっちかえば昔のひとつだからじゃないかなと思う。」「日本にはこんないい嫁はいないと言って……」

又、韓国人妻は日本に来たからには日本の文化、風習に親しみを持とうとする。

「日本に来たからには日本人になる。」「何でもこのことを受け入れようとする。」「誰よりも一生懸命がんばっている。」「名前を(日本風)に変えた。」「(10)ここで「日本人になる」ことは、「韓国人を捨てる」という意味や「日本社会に合わせる」という意味等の様々な意味を持っている。その他にも、子供が生まれるとお宮参りや七五三の参りをし、ひな人形を飾り、ひな祭りをする(11)など日本の伝統的な子育ての行事を行っている。

一方、家族側としては、好んであれ好まなかったのであれ、また嫁の来手がなく仕方ないのであれ、外国から来た嫁を受け入れた以上はその文化を受け入れなければ

ばならないという態度も所々見られる。その態度は中でも、食文化の受け入れにおいて著しく見られる。韓国人妻は韓国の食文化の代表にも等しいキムチを作り、家族がそれを食卓にあげて食べている(12)。そして家族として当然の、家族同伴の外食、外食、温泉行き等もしている(13)。家族の外、つまり親戚や地域社会に対しては、韓国人妻は自分の世代や年齢に応じた接し方をしており、日本社会一般で行なわれるしきたりを夫や家族から学び行動している(14)。

## 二、韓国人妻の価値観に適合しない場面

家族生活において韓国人妻は自らの家族観を以て行動する。しかし夫とその家族の家族意識との違いは韓国人妻を戸惑わせることとなって、葛藤する。

「出る人が出ていかずにいるから問題が起きるのよ。」これは、夫の母と同居することになった韓国人妻がそこに夫の姉もいることを言っている。韓国人妻は、韓国の伝統的家族像に見合って、女性は結婚して家を出て行くべきであり、嫁がその家のあとを継ぐことが道理であると考えている。従って嫁いだ先の家で夫より年上の姉が留まっていることに不自然さを感じる(15)。

「私は兄が二人いる。」「結婚前は炊事の支度をした

ことがない。」「二番目の兄が同居していた。」

このことからわかるように、韓国では結婚は兄弟の順番に行なうことが自然であり、結婚前は兄嫁に家事をして貰うことがごく自然なことで考えられている。つまり韓国の価値観を日本の家族に当てはめて考えることがしばしば起きる。

このように「イエ」の観念を持つ韓国と日本の家族意識の内容は一見同じように見えて、細部に入ると違いが現れてくる。韓国が「血縁」で作られた「イエ」であるならば、日本は「生活の場」としての「イエ」である(16)。韓国人妻は「イエ」の観念に伴う家族関係、すなわち親子関係、きょうだい関係に韓国の価値観を当てはめることとなる。

「『息子が帰ってくるというのに母という立場でよくもそんなことが言えるんですね』と言い返しちゃった。」「姑さんが嫁にそんなことを言っているの？」  
「義理の弟が兄嫁に対して異性感情を持つなどということが理解できない。」

ここで、韓国の価値観を持つ韓国人妻が家族の期待に添えなかったことで葛藤している。韓国人妻は、親といふのは無限に子に徳を与えるもので、子は無条件に親に

孝を行なうことが正しいと思っている。従って姑の家で夫の食事を作ったとき「自分の家から材料も持ってこないで(中略)」と言われて、日本と韓国の親子関係の違いを見せ付けられて苦しんでいる。

他人同士の生活ではトラブルは付きものである。韓国人妻は、個人レベルのことだけでなく、民族レベルの生活習慣の違いによるトラブルにも遭遇する。個人レベルのトラブルには、共同の設備の使い方等があり(17)、民族レベルのトラブルには、住環境の違いから出てくる生活習慣等がある(18)。また双方の思いやりの行き違いもある(19)。かしそこには価値観の違いだけでなく、韓国人の嫁に対するさげすみもある。家族はしばしば夫婦の生活の中にまで入って来る。家族が夫婦の経済権を管理したり、嫁の対人関係を管理するケースも見られる(20)。

### 三 家族をめぐる問題場面

Ⅲで述べたような韓国人妻の生活状況は、次のように整理される。家の中、即ち家族との関わり場面と、家の外、即ち親族関係や地域社会との関わり場面である。それらは、韓国人妻が「理解できる場面」と「理解できない場面」の二つの場面に対応する。ここでは「理解できる場面」を「調和」、「理解できない場面」を「葛藤」

と呼ぶこととする。

ここで「調和」というのは、韓国人妻が自分の価値観に照らし合わせて理解できる場面のことをいう。ただしそれは、韓国人妻にとってつねに都合のいいことを意味するわけではない。「葛藤」というのは、韓国人妻が自分の価値観に照らし合わせて理解できない場面のことをいう。ただしそれは、つねに都合の悪いことを意味するわけではない。〈図1〉を見られたい。

〈図1〉

|     | 調和 | 葛藤 |
|-----|----|----|
| 家の中 | a  | b  |
| 家の外 | c  | d  |

- a : 家の中での調和場面  
 b :       "       葛藤場面  
 c : 家の外での調和場面  
 d :       "       葛藤場面

#### a 場面

家族が韓国人妻を家族成員として認め、妻は日本に馴染もうとする。家族が妻を家族成員として認めるということは、外国人である嫁を認めるということであり、その民族文化を受け入れることである。韓国人妻は家族の属する日本社会に学ぶ姿勢を持つが、そこには韓国と類似する家族観があり、その分日本の家族に溶け込みやすい条件となる。家族にとっても嫁が持つ儒教的家族観は受け入れやすい条件となる。

#### b 場面

家族が韓国人妻を家族成員と認めない場合であり、妻にとっても自分の価値観では理解できない場面となり、不満を抱いて葛藤する。家族観の細部での違いから双方が互いに理解できなくなることによって、妻は葛藤する。またそこには民族的な生活習慣の違いや個人による適応度の違いからくる葛藤もある。家族は、日本人というドミナントな立場から妻に「日本」を強要するばかりでなく、マイノリティとしての「在日」のイメージを重ね合わせて妻に接する。

#### c 場面

妻が韓国人として家の外に出たり、名乗ったりすることを家族が認める場合であり、妻もその家族成員として

相応しいようにふるまう態度を持つ。その場合、家族は妻に民族性をそのまま出すことを勧め、妻もそれに納得の上で日本人の嫁に相応しいようにふるまう。

#### d 場面

妻が韓国人として家の外に出たり、名乗ったりすることを家族が認めない場合であり、妻もその家族成員らしくふるまおうとは思わない。家族は外国人である嫁を認めず、嫁にひたすら「日本人」らしい行動を要求する。その場合、家族は有無を言わず妻にそのような行動を強要する。韓国人妻は、個人による適応度合の違いに応じて態度が左右される。

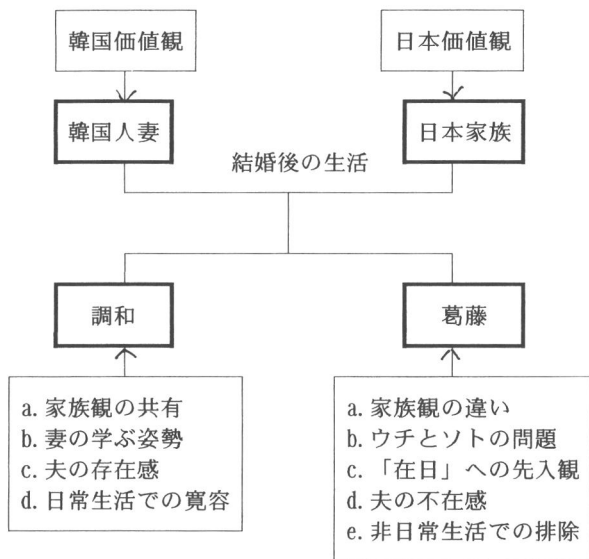
### IV 分析と解釈

#### 一、原因分析

〈図2〉は韓国人妻と、夫（及びその家族）が結婚前に育んだ価値観を保持し、結婚後の生活を営んでいく上でどうなるかを表したものである。矢印は影響の方向を意味している。結婚後の生活においては調和する場面と葛藤する場面が現れる。これらの場面は、特に象徴的な生活場面として〈日常生活〉〈非日常生活〉にそれぞれ対応する。

ここで〈非日常生活〉①とは、冠婚葬祭等の、行動規

範の規制がとりわけ強い生活場面をいう。その場合〈日常生活〉には「調和」が、〈非日常生活〉には「葛藤」が対応することになる。





「調和」や「葛藤」を促す要因としては、次のようなものがある。

## 1 調和を促す要因

### a 家族観の共有

韓国と日本は儒教文化と仏教を共有し、家父長制、父系制、夫處制（嫁入婚）であり、世代を超越する抽象的で観念的な「エイエ」の観念を持つ。そのため、韓国人妻は、「韓国でもありうる話」だと納得する。現代では、伝統的家族観は薄れてきたものの、そのような家族観は日本人の精神の深部に残っている。

### b 韓国人妻の生活の場・日本社会に学ぶ姿勢

父處制に従うだけでなく、新しい環境で生きていくとする姿勢のことである。

### c 夫が深く家族生活を主導するという存在感

韓国人妻を迎えた夫が家族との掛け橋の役割を担い、家族からではなく夫を通して日本社会を学習する。

### d 「日常生活」での寛容

日常の家族関係においては普通、行動規範は寛容であり、その中で家族生活が行なわれる。

## 2 葛藤を促す要因

### a 細部における家族観の違い

日本も韓国も「エイエ」の観念を持ちながらも、韓国は「血縁」を中心とした観念であり、日本は「生活の場」としての観念が強い。その違いから「孝」の観念・親・親族・きょうだいに対する家族意識の違いが生まれる。

### b 異質な存在に同化を強制するウチ社会の問題

韓国人妻は、家族の意向で名前を日本名に変えることを強制されたり、日本人の妻としてふるまうことを要求されたりして、民族性が認められない。韓国人妻は家族の様子を伺いながら適度に調子を合わせる。しかし、韓国人妻が異議を申し立てると、家族は妻を家族成員から排除する態度を示す。

### c 家族が「在日」をイメージしての韓国人妻のさげすみ

日本の近代史の中で形成されたマイノリティ「在日韓国・朝鮮人」に対する意識は、日本家族の韓国人妻に対する先入観を持たせ、それが家族と妻が対立する場面で現れる。

### d 家族関係に夫が中心となって関わり、うとする意識

の無さ——夫の不在感——

「父なき社会」とも言われる日本の社会では、息子は「母親との一体感」を持ちやすく、結婚後も自分が中心となりたがらないことが多い。その時、韓国人妻は家族との接触を夫という濾過器を通さずにストレートにとることになる。

### e 儀礼的行為に関わる〈非日常生活〉での排除

行動規範が強い冠婚葬祭や地域社会との関わりにおいて、家族は韓国人の妻の民族性を隠そうとする。

この他にも、同居か別居かが間接的ではあるが、家族や妻の態度を決定する大きな要因となる。同居／別居は夫の存在／不在感に大きく影響する。

### 二、韓国人妻の意味世界

以上、家族意識を中心に韓国人妻の生活状況を見てきた。そこで韓国人妻は自分をどう捉え、日本社会の中でどう生きているかをインタビューデータをもとに再構成し、その特徴を分析したい。ふたたび〈表1〉を見られたい。

#### 〈Aさん〉

来日当時は夫の職場の関係で東京で生活する。その後

広島に移り、夫の親の近くに住む。父親が亡くなり、母親と同居に至る。六ヶ月同居し、その後親の家のすぐ近くに別居する。二年後、母親からマンションを買ってもらい現在の住まいに至る。親の家からは車で五分、自転車で一〇分位の距離にある。夫は韓国留学の経験があり、韓国語はほぼ完璧である。

Aさんは、家族を大事にしたいという気持ちが強く、家族の中で自分を韓国で身につけた「嫁像」に合わせ、「嫁の道理」に従って行動する。夫の母には「よい嫁」として受け入れて貰えるよう、義母を優先的に考えるなど「序列」を守る。結婚後ずっと無視する態度を取っていた夫の姉には、韓国への旅行に誘い、韓国での自分の力を発揮することによって自分の存在を認めて貰うなど、積極的なアプローチをしている<sup>(2)</sup>。彼女は韓国の価値観だけでなく家族の価値観をも受け入れて、自分特有の価値観を作りあげている。ここでは家族との繋がりにおいて夫がしっかりと存在している。

#### 〈Bさん〉

来日直後は親の家のすぐ隣りに住み、後にマンションを買って引っ越す。親の家からは車で五分程度の距離である。結婚後の生活の半分を韓国で送っている。年二／

三回韓国の実家に帰り、韓国での滞在は一回に二〜三ヵ月である。いつも子供同伴であるが、最後の韓国帰りは第二子だけを連れて帰った。

Bさんは、ものごとの判断基準を韓国で身につけた価値観に置き、日本での生活を韓国社会に合わせて解釈していく。特に、人間関係においては、韓国流の「自分の本心」で向き合うことを望んでいるが、「日本人とは本心で付き合うことができない」として、自分の考えと違うことに会おうと「あれもやっぱり日本人」といつて厳しい批判の目を向ける<sup>23</sup>。また、食事、名前、家族関係等あらゆる面で韓国風にふるまう<sup>24</sup>。そして受け入れない／受け入れられないというかたちの葛藤が激しく、家の中や日本社会で自分の世界を定着できずに頻繁に韓国へ帰る。夫は母親と親密に接触し、家族に定着できないBさんの代わりを母親に補ってもらう。

### 〈Cさん〉

来日当初から親のいるマンションの隣部屋に住み、夫はすぐ近くで親とともに果物屋の家業をやっている。次男が生まれて、家が狭いことで隣のマンションに引越す。親とは常に生活上の連携を保っている。

Cさんの夫が親と家業を営んでいることから、経済的

に独立できず、親と近い関係を保っている。そのため、生活面で親との関わりが欠かせない。その中でCさんは、日本に馴染み、嫁であることを受け入れる態度でいるが、子育てにまで親が介入することに対しては、「子供のことは、母親である私のほうが一番よく考えている。なになんでも子供を泣かすのか、早く寝かせなさいとかいっている」として拒否反応を見せている。Cさんと義母の関わりの中では、夫の位置が弱く、夫をはずした親とダイレクトな関係となる。「今までは、嫁だからお母さんのいうことを教えて貰うつもりで従おうとしたんだけど、度が過ぎる。最近はお母さんとの関係が疲れる。」しかしそれは韓国で身につけた価値観を問いなおすきっかけともなる。

### 〈Dさん〉

家族が勧めた見合い結婚で、結婚当初から親と同居している。現在夫の両親と夫の弟との五人生活である。夫は山形市内に仕事を持ち、帰宅が遅い。家族は小規模の農業をしており、Dさんも庭で野菜を栽培し、畑や田で手伝いをしている。また義弟の毎朝の弁当を作っている。

Dさんの場合は、義父が経済権を握っていて、生活全般に親との関わりを持っていることから、親の期待に添

うような生活パターンを取っている。「(家の人が言うには)夫の名字を名乗るべきだって」と言われると名前を変えて登録し、韓国人同士の中でも日本名で名乗っている(㉠)。Dさんは、親の言うことをそのまま正しいと受けとめて、日本の伝統的家族観を踏襲する。しかし食事文化だけは家族の中に浸透させており、そこにDさんの韓国人としてのアイデンティティを置いている。韓国の価値観を持つDさんは、徐々に日本の情報を入手する中で、「ここでは・・・なんだって?」と日本の家族関係に疑問を持ち続けている。

### 〈Eさん〉

当人同士の見合い結婚で、結婚前から夫は結婚後の生活のため、自分のお金と銀行の融資で親の家のすぐ前に家建てて一人暮らしをしていた。Eさんは結婚と同時に夫の家で親と別居生活をする。しかし親は自分の家同様に出入りする。Eさんも親の居所を毎日のように訪ねる。それは寂しいからだという。

Eさんは、「日本に来たからには、日本人になる」と言って、日本に同化する態度でいる。それは夫の家族に従うという儒教思想と、生活の場が〈日本社会〉であるということにより、積極的に「日本社会化」しようとい

う態度である。名前を日本名に登録し、生活上でも日本名をほぼ全面的に使用している(㉡)。また韓国の行事を行なうこともなく、日本の風習に全面的に従っている(㉢)。

このように「日本人」になることを宣言し、日本に積極的に同化しようとしながらも、韓国人同士の集まりを好み、韓国人としての生活パターンを取るという矛盾も抱えている。(㉣)そのような彼女に対し、家族は「家の中ではいいけど、外では韓国語をしゃべらないように」というように、家の中では名前や儀式以外の日常生活に関して韓国人として認める態度をとるが、家の外に対しては全面的に日本人としてふるまうことを要求している。

### 〈Fさん〉

家族が勧める見合い結婚で、結婚当初から親と同居する。結婚二年後に家を改築する。夫は山形市で仕事もち、家族はさくらんぼの畑で農業をしている。Fさんは二〇才になる子供を結婚後三年目に韓国から日本に呼び寄せている。面接当時は妊娠しており、出産が近い状態だった。出産休暇を貰う前は呼び寄せた息子と弁当屋の仕事と畑の仕事をしていた。

Fさんは、韓国から呼び寄せた息子が学校へ行くことを望んでいるのに山形市までの交通費と学費で自分の力

が及ばないため、「母親の資格がない」と自分を責めている。Fさんは息子を呼び寄せたことで、生活費の面で夫や家族に気兼ねをし、息子と外へ働きに出る。息子は日本語ができないので昼間の仕事はできない。ここでFさんは、韓国の価値観に基づいて母親像を創り上げ、その母親像に満たない部分に対して深く反省している。またその母親像に照らし合わせて夫の母を見、批判したり承認したりする(29)。日本に来て間もない息子に義母が日本語で長い昔話をするのを見て、「お母さんの昔話だれもわからない。」(この子は)一つの単語もよく聞き取れない」といって止めさせる。義母はまだ日本に来て間もない新しい家族に対し、日本人と同じことを要求している。そんな義母との生活上のトラブルへの対応として、Fさんは、「にっこりしてその都度言った方がいい」という。その理由としては、「時間が経つと忘れるし理解して貰えない」からだという。そのように自分を主張する背景には、夫が主権を持っていることと、Fさんが自分の生活費を稼いでいることがある(30)。このように、韓国の価値観をもとに日本の生活にあわせて受け入れられるという「融合」の態度がみられる。

このほかに韓国人妻は、「葛藤」場面での対応として、

次のような行動に出る。場面場面での対応として、無言の対応、言い返し、冷やかな行動を見せる。情緒的な欲求としては、韓国人同士で集まって愚痴をこぼすことでストレスをためないようにする。それでも解決できない問題が溜まってくると、「体の痛み」「神経質湿疹」(31)等のストレス反応が出る。また離婚に至るケースも見られる。

以上は、特徴的なことを述べたに過ぎない。例えばAさんであっても、BさんやCさんのように日本の家族関係に疑問を持つこともあり、Fさんのように家族関係のスタイルを融合する態度が見られたりもする。

## V. まとめ

IVで、AさんからFさんまでの家族生活の捉え方を見た。Bさんは韓国志向が強く、日本の家族に馴染めない状態にある。反対にEさんは、「日本に来たからには日本人になる」と決意して、積極的に同化をめざす態度をとる。CさんとDさんは、自分の意志よりも家族の期待に添い、そのため後から葛藤を抱えることになる。AさんとFさんは、確たる意志を持っているわけではないが、日本の家族と融合点を見付け、場面場面で自分の選択をしながら家族生活を送っている。これら六人の家族生活

をIVの一の原因分析に照らし合わせて再解釈すると次のようである。

Aさんは、自分の家族観である「嫁像」を持って接する。それに対して、家族は好意を持つ。しかし、韓国の家族観と違う側面に遭遇すると、生活の場である日本社会に適応しようとする部分では納得し、納得できない部分では葛藤する。しかし、夫の存在感は強く両者が互いの言語での会話が可能であるからこそ、両者の文化の理解や気持ちを察し合うことができる。それは、家族からの「在日」と重ね合わせた先人観や、家の中のタテマエ抜ききのホンネが露出することであっても、夫という濾過機を通して伝わることで、その強度は弱まって伝わる。

Bさんは、主に家族との家族観の違いに関心を向けている。夫は妻と話し合うというより、母親に頼る生活を送っていることから、両者の気持ちが一致しないまま平行情線を辿る。Bさんが日本と違う韓国の家族意識の主張が強いいため、その他の問題は両者の間に入り込めないことも多く、また気付くことが出来ないこともあると思われる。

Cさんは、Aさんと同じく「嫁像」を持って家族に接するが、家族からの好意は聞き取りの中からは感じ取れない。家族生活の中で夫の影は薄く、その他の家族の比

重が大きく占めている。そのことから、Cさんに対する蔑視の目はダイレクトに伝わり、それに対する夫の中和剤の役は果たされていない。その場合、家族は外には決して見せることのないホンネが露出し、その強度は弱まることなく、ストレートに伝わる。

Dさんも「嫁像」を持って家族に接し、家族もそのことには好意を持つてはいるものの、表面では当然として、日本の家族の——その家の——家族意識を植え付けるなど同化を求める傾向が強いといえる。その中でも普段行なわれる日常生活の面ではともに生活するもの同士の寛容が見受けられるが、儀礼的な面となると、Dさんの民族性は隠されて「日本人」を飾り付けられる。しかし、生活の場面では始めから見下げたつもりの「先人観」が時々作動する。夫の生活パターンからして、家族との関わりの中に夫の関与する時間帯が少なく、Dさんの場合もCさん同様夫という中和剤は果たされないことが多い。

Eさんも、「嫁像」を持って家族に接しているが、それよりも「何でもこのこと——日本のこと——を受け入れる」という、自ら「日本」に同化しようという気持ち強い。その態度は、どのような家族からの蔑視や差別の態度を受けるに当たっても、自分を変えて家族の期待に沿う姿勢でいる。しかし、そうすることで家族から

の蔑視や差別は温和されることなく、ことばは柔らかなものの同化への要求はエスカレートしていく。

Fさんの場合、家族の中に二つの家族グループがある。韓国の家族意識で結ばれた家族と、またその家族が日本の家族観を持っている家族に合流したことである。その両家族の架け橋となっているのがFさんである。常に両家族の調節を余儀なくされる立場である。だからこそ、生活の場面場面での選択が要求される。家族からの理不尽な待遇に遭遇すると受け身のままでなく、納得いくまで立ち向かう。そのようにできるのは、同居でありながらも親から自立した夫の存在がある。

このように、国際結婚で来日した韓国人妻は様々な形で家族生活を送っている。韓国人妻の事例調査を通して共通して言えることは、次のように要約される。第一、韓国人妻は多かれ少なかれ韓国で身につけた儒教に基づく家族観を持って生きていることである。

第二、日本社会の新人として学ぶ姿勢を持っていることである。韓国に近い家族観は日本の家族には異質と感ぜられないので、日本の伝統的家族意識を以て韓国人妻に期待を抱いていく。家族観の枠組が韓国のそれと類似しているので、韓国人妻は受け入れやすくなる。

第三、日本の家族は家族の一員となった韓国人妻に対して、普段のソトでは現れることの少ないウチの顔としてのホンネが現れる。そのホンネとは、潜在意識の中にあった「在日」からの連想と、異質者を排除するという、はじめから見下げた見方である。中には日常生活上の慣習も見られるが、非日常生活の場面では「日本人」が強調される。

第四、夫の存在感はいかなる家族の対立でも効力を持つことができる。親との同居／別居が家族の対立に間接的に影響する。夫の親からの自立は、Fの事例からも分かるようにその要因をやらげることができる。しかし、六人のうち四人の韓国人妻の夫は、本当の意味での自立<sup>32)</sup>は行なわれていないと見做すことができる<sup>33)</sup>。

結婚生活での単なる葛藤というだけなら、日本人同士の結婚生活にも見られることである。日本社会での新人である韓国人妻は学ぶ姿勢をもっている。家族観の枠組みが韓国のそれと類似しているので、韓国人妻は受け入れやすくなる。しかし日本人夫の「母親との一体化」により、韓国人妻は親とダイレクトな関係を持つことによる、韓国同士の結婚生活にも見られることである。そのため妻は親の期待と直接にぶつかることになる。同居の場合はそのような関係はより一層強

くなる。

結婚で来日した外国人の家族の生活をみることで、日本社会の外には現れにくい差別意識が明らかになる。たんなる夫と妻の間の葛藤問題ならば、フェミニズム研究の分野に委ねてもいいだろう。しかし「偏見をもって(日本の価値観が)強制される場合は、日本社会という権力からの行為となり、それは差別行為」と言える。新来韓国人妻は日本人のアジア人蔑視、「在日」に対する差別観、日本人妻を貰えなかったという自尊心の毀損という三つの重荷を背負っている。

以上、韓国人妻の六人を中心とした内面世界の解釈を行ってきたが、日本家族からの聞き取りではなく、韓国人妻からの聞き取りであったため、偏った解釈になったかもしれない。しかしそれもまた日本社会の一面として解釈することはできないだろうか？

また、韓国人妻の結婚への動機によっても結婚生活が異なってくると思われるが、ここでは扱わなかった。また結婚後の子供の出生、成長とともに教育問題が次第に表面化してくるだろう。その研究もまたこれからの課題として残しておきたい。

### 〈注〉

- (1) 奥田道子・広田康生・田島淳子『外国人定住者と日本の地域社会』
- (2) 駒井洋『定住化する外国人』
- (3) 桑山紀彦「山形県の農村部に嫁いだ外国人花嫁の祖国の文化、宗教、倫理の背景の調査研究——県内の適応状況と合わせて——」
- (4) 新田文輝『国際結婚とこどもたち』
- (5) その他としては、国際結婚の経験談を紹介した石川幸子『国際結婚——地球家族づくり』がある。
- (6) ——は日本語での会話をそのまま引用し、線のないものは韓国語での会話を報告者が日本語訳したものである。ここでは日本人女性も同席したため、日本語での会話が多くなった。Bさんの聞き取りの中で。
- (7) トンケ、トン：うんこ、ケ：犬。雑種の犬のことを指す。韓国で雑種の犬は普段紐ほどきにされて草むらや道端の子供のした大便を食べることがあるので、身分が低い犬という意味を持つ。軽蔑語として使われることが多い。
- (8) Aさんの聞き取りの中で。
- (9) 韓国と日本に共通する家族観：父系制社会という点



で共通している。すなわち、一、儒教文化と仏教の共有、二、家父長制・父系制・父處制、三、「イエ」の観念——世代を超越する抽象的で観念的な存在

李光奎「韓国家族の構造分析」三〇六頁

崔在錫「韓国家族研究」第九章

(10) 名前を変えることには、都市と農村の間で差が見られる。

都市：外国人登録には韓国名で登録している人が多く、

名乗るときは人によって様々な形で現れてくる。

夫の名字で名乗る人、韓国名で名乗る人がいる。

また韓国名と日本名を使い分ける人もいる。また

日本人が韓国名を聞きたがるときは教えてあげる、

韓国名を聞いた日本人が韓国名で呼ぶというよう

なこともある。

農村：外国人登録には殆どの人が日本名で登録（例え

ば、名字は夫の名字で、下の名前は日本名(○子)

で登録)。自己紹介も日本名で行なう。韓国人同

士では日本名で呼んだり韓国名で呼んだりする。

(11) Aさんから「一緒にひな祭りをしよう」と呼ばれた。

桜餅を持って訪ねると、もう一人の韓国人(主な調査

対象者の中には入っていない)がいた。彼女にも三才

の娘がいる。訪ねた人の娘は着物を来ていた。韓国人

妻たちは子供たちをひな人形の前に座らせて写真を撮り、食事を始める。食事には赤飯と煮物とキムチが出た。食事の後、桜餅とひな人形の飾り台のおかしを食べた。二〇〇〇年三月三日参与観察より。

(12) 山形市の一家での朝食の食卓を見ると、おかずの半分が韓国風であった。キムチが二種類(白菜キムチ、カクドゥギ：だいこんをさいころ形に切って作ったキムチ)に韓国味付けのり、漬け物(青菜——山形県特産物)、ブロッコリ、納豆であった。

(13) 山形市での参与観察：訪問した初日、私ที่บ้านに着く前からこの日の夕食は外食をして、その後温泉に行く予定にしていたようだった。：車二台で出かける。Dさん、夫、父、母、夫の弟等その家に住んでいる家族全員と私で六人だ。「トマト&スパゲティ」というレストランに入った。Dさんは父と母のメニューを選んで進める。父と母はすんなりと進めるものに従う。：食事が終わって、車に乗り温泉へ行く。大抵が家族で行くとのこと。Dさんと私は一時間余りかかって出てくる。その他の家族はロビーで待っていてくれる。私がいいつもこのように待っているんですか?と聞く。と夫のほうが「しょうがないね。女の人の風呂は長いんだから」と言う。怒ってもなく、笑ってもなく平然

とした口調だった。父は笑顔を浮かべながら「私たちはここで待つ。待っている」と一人ごとのように二〜三回呟く。

広島市での聞き取り：Aさんは土曜日の夕方は夫の家族と過ごすことが多い。外食に行ったり、温泉に行ったり、姑さんの家やAさんの家で夕食をとる。

(14) 「私はこのことを何でも受け入れようとしている。」「私としてもお母さんから教えて貰うことも多く……。おかず一つでも作って貰ったら私が真似して作ることもできるし、……。」と言うように、韓国人妻は日本の生活ぶりを家族を通して最初に学び取ることになる。

(15) 「女はへ家を出た者」であり、嫁いで行ったならばその家——婚家——で死に、その家の魂になれ」という諺の通り、娘はへ家を出た者」になるべきだと思っていることが伝わる。

(16) 李光奎「韓国家族の構造分析」三〇六頁  
崔在錫「韓国家族研究」第九章

(17) 風呂、トイレ、台所の使い方、特に、同居の場合に著しく見られる。

Aさんの場合：「夕食後に、（食器を洗わずに）子供を寝かすために一緒に横になって寝ちゃったの。そ

したら、朝起きて言うのよ。姉さんは（聞き手）はそんなことない？義母さんはそんなことがだめなのよ。」

Bさんの場合：「風呂に浸かりたいんだけど、浴槽の水を三日も替えないから、……。温泉にいくの。家ではシャワーさえもいやになる。」「義父が・・・

小便を便器の周りやらトイレの床にぽと落とすて臭い。」「台所には義母が出て来ないで欲しい。一回台所を使うと、台所が全部汚れてしまうの。」

(18) ここでも主に同居の場合によく見られる。韓国の家はオンドル生活で、家の掃除は拭き掃除が主になっている。そのため、雑巾の管理として熱湯消毒を頻繁に行なう。雑巾でも、台ふきんや下着と同じように熱湯でボイルする習慣がある。

「食べることも満腹して食べれない。ここでは、家族のこと気にしなくていいというけど、やっぱり韓国人なんだから家族のことも気になるのよ。食べたいものがあって買って来たたら、一人では食べにくいから一緒に食べようと思ってみんながいる時に出して置くと、ここの人は、みんな食欲旺盛だから私と夫が食べる分がなくなる。」

(19) Dさんは、キムチに入れる材料を韓国の母親から二

回送って貰う。一回目に、義母はそのお返しとしてなにかを送る話を提案するが、Dさんと義母の考えの違いで一致点を見ず、お返しの話は消えてしまう。義母は「家で取れる白菜か野菜を送る」と言うが、Dさんは、「白菜などは、韓国でもあるので韓国でないものかお金で送った方がいい」といい、両者の相談は一致できないままになった。二回目は、初めからお返しの話は持ち出されていない。

(20) ・夫婦の経済権管理（Dさんのケース）

結婚前から夫の給料を舅さんが管理していて、結婚してからも舅さんが管理を続けていた。買い物をするお金を渡される。Dさんはそのことに異議を持ち数回に渡って異議申し立てを行ない、結婚八ヶ月で韓国人妻は夫の給料の通帳を渡される。その当時のことを彼女がこう語っている。

「この人は全然お金がない。今まで給料貰ったのはみんな父の通帳に入れてそれでこの家族全員の生活に使われたの。」「私がここにきて八ヶ月でやっと夫の給料に対する管理権を獲得できたの。今になって夫が自分の本心を言うんだけど、これまで自分の給料は親が管理してお小遣いを少し貰うだけだったのよ。」「

また韓国人妻が夫婦の経済権を管理することで、家族ではこんな声も上がってくる。「あの人何を信じてまかせたの?」「まだ早すぎる。」「

・嫁の対人関係管理（Eさんのケース）——Dさんからの聞き取りデータ

Eさんは韓国人妻同士のトラブルに巻き込まれたことがある。その際、Eの義父はその当時のことをテープ・レコーダに録音して後日Dさんに聞かせる。その後、Eさんは外出の度に外出先を聞かれるようになる。そして、韓国人が住んでいる家によることがあると、「そこは行かない方がいい。向こうから訪ねて来ることは仕方ないけど、こちらからはなるべく近寄らない方がいい」と言われている。

(21) 坪田・水越「近代都市職人の生活世界」(一九九九)

都市社会学会年報 一七号

坪田・水越は行為レベルについて〈日常性〉〈非日常性〉という概念を設定した。〈日常性〉とは日常生活レベルでのことで、日々の生活が構成され、反復される「通常」の行為レベルに関わる次元だと言い、〈非日常性〉とは非日常行為レベルでのことで、特定の価値のもと、(家族)集団を強力に統合する儀礼的行為にかかわる次元で、具体的には、冠婚葬祭、年中行事

や、国家や天皇にかかわる儀式等を挙げている。

- (22) Aさんは、韓国での自分の存在を見せるため、家族同伴での韓国旅行を企画し、実行するなど、積極的に家族と関わっている。その結果として、Aさんは家族のことに関して、「結局は私がお人を育て上げてきたといえる」と言う。

- (23) Bさんとは、一二時に、私の家で食事をする約束をしていた。

一二時二〇分前だった。前もって準備(食事)しておく間もなくBさんが訪れてきた。日本人女性との同僚だった。Bさんは、「前もっていわずに連れてきて、ごめんなさい。あなたが気難しい人だったらこんなことしないんだけど」という。しかし、私とは二〜三回ちょっと会っただけで、長い会話を交わしたことはこのときが初めてである。Bさんはまた、「こんな出会いも年ぶりかしら」とつぶやく。私に会って韓国人同士の人間関係にはっとする様子が伺われる。

反面、日本人との人間関係に関しては、「何か気持ちか・・・。自分を本心でね、付き合いができない。：。本当に友達とすればね、全てを見せてもいい。そんな友達が日本では難しい。」「私の家の前の女の人もいい人。しかし、：彼女もやっぱ日本人なの。

情が通うそんな友達ではない。」

- (24) Bさんの家に呼ばれて訪ねた。Bさんは、キムチのチヂミでもてなしをする。Bさんは「私は韓国の味が好き。キムチも辛い方が好き」という。日本の料理にはあまり関心を示さない。

- (25) Dさんの場合は、名前が韓国語、日本語のどちらの読み方も同じ発音になり、また韓国にも日本にもある名前だったので、「そのままでも日本人の名前になるから、名字だけ変えればいい」との家族の意見で名字だけを夫の名字に変えて登録した。

- (26) 名字を夫の名字に、名前は「〇子」で登録している。また家の中外はもちろん、韓国人同士でも日本名の呼び方が度々行なわれる。

- (27) 子どもの出産後、韓国の風習である「百日」、「トル」(一才祝い)の祝いを行っていない。それに対して日本の風習である「お宮参り」「ひな祭り」を行っている。

- (28) Dさんの聞き取りを通して、Bさんの普段の生活が伺われる。

『「チョクニョン(倭女―日本の女)になる』『韓国人とつき合わない』』と言っては、韓国人と会っているし、キムチ食べないとご飯が食べれない。行動する

全てが韓国人スタイルでやっている。」

(29) Fさんは、息子の結婚のとき経費がかかったことで、家の財政が苦しいというお姑さんの話に対して、子供を結婚させるのが親の道理であるはずなのが、嫁のせいにいい回すことで、「お母さんは若いとき何したの？」と批判し、その弁明をするお姑さんに対し「私はお母さんの子供の時のことは知らない」と打ち切る。一方、姑さんの「性格が立派、みんなに親切」なことにすごい評価をしたりもする。

(30) 「うちでは夫が親を左右する。会社で四〇〜五〇人を使っている人らしく、(母親扱いが)少し違う」ことから、夫が家族の中心となることがわかる。またFさんは、韓国から息子を呼び寄せたことで生活費のことを気にして、家業を手伝いながら、息子と勤めに出ている。

(31) 広島の人からの聞き取りから：

「私が耐えられないから韓国に行くのよ。ここでは生き難いの。体が痛くて、起きることも出来ないほど体が弱る。・・・日本で生きていくにはしんどい。」病院に行っても病名がわからない。薬はくれるんだけど、その薬を飲んでも治らない。・・・汗をかかなくて痛みは治らない。トイレも行けない。起き上がるこ

ともできない。・・・それで韓国に行くのよ。本当に笑わせる。韓国に行くことを決めたら、その時から変わる。韓国に帰ると私の母が言うの。『お前いつ痛かったのか？仮病だったでしょ。韓国に戻りたくて。』とね。見てない人からは仮病だと思われる。」

山形県での聞き取りから：

「最近ストレス病になったのよ。汗疹が出る。寒いときでも。医者が言うにはストレス湿疹のようだって。体中に、足から上がってきて体全体に広がる。今はお尻のところまで来ている。」

(32) ここで、本来の意味の自立というのは、親からの経済権の自立のことよりも、精神的な自立のことを意味する。

(33) 日本人の夫が親から自立していないということを過度に一般化することはできないが、韓国人妻の夫——外国人と国際結婚をした日本人男性——の場合、多くの夫が自立していないというのは否定できない。

## 〈参考文献〉

- 大塚久雄・川島武宣・土居健郎『「甘え」と社会科学』  
弘文堂
- 相良亭「日本人の道理観」『講座日本思想三』東京大学  
出版会
- 仁戸田六三郎『タテマエとホンネ』ダイヤモンド社
- 南博編『日本人の人間関係事典』講談社
- 「タテとヨコ」市川孝一
- 「内と外」寺沢正晴
- 「『甘え』と自立」市川孝一
- 「ホンネとタテマエ」折橋徹彦
- 「家族」松原治郎
- 「家族の人間関係」依田明
- 「地域社会の人間関係」松原治郎
- 土居健郎『「甘え」の構造』弘文堂
- 土居健郎『表と裏』弘文堂
- 崔在錫『韓国家族研究』一志社
- 崔在錫『現代家族研究』一志社
- 李光奎『韓国家族の構造分析』一志社
- 李光奎『韓国家族の社会人類学』集文堂
- 川島武宣『イデオロギーとしての家族制度』岩波書店
- 中野卓「家族構成」『郷土研究講座三——家』角川書店
- 桑山紀彦「山形県の農村部に嫁いだ外国人花嫁の祖国の  
文化、宗教、倫理の背景の調査研究——県内の 適応  
状況と合わせて——」『研究助成報告論文集』上廣倫  
理財団
- 『国際家族の時代』を地方から——平成六年度研究チー  
ムA報告書』神奈川県自治総合研究センター
- 筑波君枝『国際結婚の基礎知識』明石書店、  
東京大学公開講座『親と子』東京大学出版会
- 坪田典子・水越紀子「近代都市職人の生活世界」  
奥田道大・広田康生・田島淳子『外国人定住者と日本の  
地域社会』
- 駒井洋『定住化する外国人』明石書店、  
新田文輝『国際結婚とこどもたち』明石書店、  
石川幸子『国際結婚——地球家族づくり』サイマル出版  
会